

—

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら  
おしゃかさま  
御歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉  
はす  
のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂  
ずい  
が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになって、水の面を蔽っている蓮  
おたたず おお  
の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁  
ようす  
度地獄の底に当って居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や  
針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございま  
す。

するとその地獄の底に、かんだたと云う男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢いている  
うごめ  
姿が、御眼に止まりました。このかんだたと云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、い  
ろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがご  
ざいます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、  
路ばたを這って行くのが見えました。